

舞踊と日常の movement の差異について

—メルロ=ポンティの身体図式による試論

柿沼美穂（国立環境研究所）

舞踊の movement を見た人は、誰でも、それが舞踊であると容易に推測できると思われる。おそらくは、見たものが動画でなくても、つまり movement の一瞬を切り取った絵画（静止画）であっても、それが日常的な movement ではなく、舞踊であると指摘できるのではないだろうか。それは、紀元前のエジプトの絵画であっても、近代におけるマティスの「ダンス」シリーズであっても同様である。

こうしたことは、舞踊の movement が、日常的な movement と異なる特徴を有するというを示唆している。しかしながら、その特徴について端的に記述することは簡単ではない。

舞踊とは何かということについては、さまざまな哲学者や社会学者、文化人類学者、あるいは評論家はその記述を試みている。

たとえば「さまざまなキャラクターを動きによって表現する模倣芸術」（セルマ・ジーン・コーエン）、「感情表現のコミュニケーションの手段」（ジョン・マーティン）、「シンボルの一様式」（ネルソン・グッドマン）のように、その内容を重視したものもあれば、「リズムカルなステップと動作」（ジョン・カス）のように、形式的な面に注目したものもある。また「生産性を伴わない社会・文化に根ざした、リズムカルな動きによる人間の身体表現の総体」（遠藤保子）のような社会的な観点からのものもある。

これらの記述はいずれもうなずけるものばかりだが、身体論的な観点からの記述があまり見当たらない。そこで今回の研究発表では、舞踊と日常の movement の違いについて、メルロ=ポンティの芸術論を基盤として考察する。彼の芸術論は絵画が中心だが、舞踊にも応用可能なところがあると考えられるからである。

メルロ=ポンティは絵画という芸術における主要なテーマを、われわれの視覚によって作り出される世界と考えた。通常われわれは、生きている世界を、さまざまな感覚によって総合的に捉えているが、絵画はその世界を、専ら視覚によって捉え直すというのである。メルロ=ポンティはこのことを「制度化」（institution）と呼ぶ。

絵画における制度化は、さまざまな要素が混在する世界から、その画家の視覚によって、その画家特有の、ある包括的な意味をもった世界が、あらためて取り出され、表現されることを意味する。

われわれが通常住み込む世界は、さまざまな要素が混在しているが、そのすべてがわれわれに開示されているわけではない。画家はその世界を実際に自分の目で見て、どのように制度化すべきか、つまり、どのような意味をもつ世界を取り出すべきかを探究し、自らの身体をもって表現する。そのとき画家は、絵画という視覚的世界の中で、「見る」という感覚がもつ可能性ができるかぎり高いレベルで展開される方法を追究している。

メルロ=ポンティは、この探究の例を「奥行き」に求めているが、それは奥行きが、「離れて持つ」という視覚の特徴と関係の深いことからだからである。通常われわれは、現実の世界における奥行きを、運動を含む多様な感覚情報を統合して理解するが、そうした働きを有する身体をもつ人ならば、視覚的契機を与えられるだけでも、奥行きを把握することが可能である。画家がしようとしていることは、まさにそのこと（＝視覚の能力を通常以上のレベルにまで引き出すことによって「奥行き」を含むような世界を再制度化して見せる）なのである。

この研究発表ではメルロ=ポンティの絵画論における考え方を参照し、舞踊における movement と日常におけるそれとの差異がどのように生じるかを考察する。絵画とは異なり、舞踊における主要なテーマは運動感覚であるが、それが日常における感覚とどのように変化するかを検証する。